

Vol. 24

2026.3

ND

キャンパス通信

わたしらしく、誇らしく

Be Notre Dame, Be Myself



京都ノートルダム女子大学
KYOTO NOTRE DAME UNIVERSITY

ND VOICE

「Blooming!」をテーマに作り上げた 笑顔が咲き誇る2日間

今回のND VOICEでは、2025年10月に行われたND祭について、
ND祭実行委員会の皆さんにお話をお伺いしました。



広報部門

K.S.さん

心理学科
3年次生

模擬部門

Y.S.さん

心理学科
3年次生

委員長

A.M.さん

心理学科
3年次生

イベント
部門

Y.Y.さん

心理学科
3年次生

模擬部門

M.K.さん

生活環境学科
3年次生

委員長

お客様に楽しさを届ける鍵は 自分自身が楽しむこと

昨年度、副委員長として臨んだND祭の経験から「もっとお客様に楽しんでもらいたい」と強く思い、今年度は委員長を務めました。仕事内容は各部門の進捗確認や外部関係者との連携など多岐にわたります。準備が進まず、一人で仕事を抱え込んでしまう場面もありましたが、他のメンバーに頼ることで乗り越えられました。

活動の中で意識していたのは、困難に直面しても「楽しむこと」です。作り手側が楽しまなければ、お客様に心から楽しんでもらうことはできないと考えたからです。その想いが形になったと感じたのは、最も準備に時間をかけたトークショー。ゲストが登場し、会場が歓喜に包まれた光景は今でも忘れられません。ゲストご本人からも「楽しかったです」とお言葉をいただき、私たちの「楽しむ気持ち」が多くの人に伝わったのだと実感しました。

4学年が揃うのは今回が最後ですが、来年もND祭は開催されます。皆さまのご参加をお待ちしています！

広報部門

協賛企業との連携で得た 確かなコミュニケーションスキル

広報部門では、パンフレットに掲載する協賛広告に関する業務を中心に、幅広い業務を担っています。協賛の依頼のため、メンバーで分担して企業へのアポイントメントや訪問、企画の説明を行いました。1つの企業やお店を1人で担当することに当初は緊張していましたが、社会人の方々と直接言葉を交わす中で、丁寧な受け答えの仕方や責任感を持って仕事をする大切さを学び、普段の学生生活では得られない貴重な経験となりました。

加えて、ゲストの方々の控室準備や来場者の誘導にも奔走し、全日程を終えた後、先輩から「先輩と一緒に仕事ができて良かったです！」と声をかけてもらったときの喜びは忘れられません。

学業と並行しながら忙しい毎日乗り越えられたのは、励まし合える実行委員の仲間がいたからこそです。この活動を通じて培ったコミュニケーションスキルや仲間と協力した経験を糧に、将来に向けて自信を持って歩んでいきたいです。

イベント 部門

雨にも負けず臨機応変に対応 温かい言葉が励みになりました

イベント部門の担当は、中庭ステージやイベントの企画・運営です。お化け屋敷などの新企画を提案したほか、既存のイベントのアップデートも行いました。

準備段階で心がけたのは、同部門の委員だけでなく、音響設備会社や学内の参加団体など、実行委員会内外の方々と綿密にコミュニケーションを取ること。企画の考案に悩んだときも、同期や後輩に相談してアイデアを出し合うことで、無事に企画を形にできました。

当日はあいにくの雨でしたが、参加団体の要望を受けて急遽会場を追加し、2拠点でステージを運営するなど臨機応変に対応できました。

また、悪天候にもかかわらず多くの方が足を運んでくださり、「また開催してほしい」と温かい言葉をかけていただいたときは、これまでの苦労が報われたように感じました。部門長として多くのメンバーをまとめ、イベントを動かすという貴重な経験を経て身につけたリーダーシップを、今後も生かしたいです。

模擬部門

半年かけて築いた信頼 仲間の支えと来場者の言葉が力に

模擬部門の役割は、約30の模擬店を取りまとめることです。出展団体向けのマニュアル作成やポスター制作、当日の本部運営など、多様な業務に携わりました。

約半年間の準備期間を通して心がけたのは、部門内で学年を越えた信頼関係を築くこと。仕事の相談がしやすい雰囲気自然と生まれ、部門長の仕事量が増えてしまったときも、他のメンバーが自然と声をかけて業務を分担できました。

入念な準備が功を奏し、当日の運営は想像以上にスムーズに進みました。わずかながら模擬店を楽しむ時間も、当日に印象的だったのは、帰路につく方から「楽しかったわ」と声をかけていただいたことです。お昼頃の出来事でしたが、短い時間でも充実した時間を過ごしてもらえたことにやりがいを感じました。

仲間たちとの信頼関係は、実行委員として活動を継続したからこそ得られた宝物です。そして、未経験のことにも勇気を持って挑戦し、最後までやり遂げたこの経験は大きな自信になりました。



「自然と遊ぼう！」 ——教員・学生・地域とともに積み重ねた かけがえない20年間の経験と学び

20年もの間多くの人に愛され続け、惜しまれながらも
2025年10月に最終回を迎えたイベント「自然と遊ぼう！」に
ついて、4名の先生方にお話を伺いました。

専門分野の枠を超えたフィールドワーク

2006年の秋、大学院の実習として開催していた子育て支援
教室「こがもクラブ」の参加者を中心に、地域の子どもたちと
学生ボランティアが集う「自然観察のイベント」を開催しまし
た。参加者の方にもご好評をいただき、発達心理学に理科
教育、そして図工科教育という異なる専門分野が重なるこ
とで、自然をテーマにした独自のフィールドワークへと育っ
ていきました。それから20年。学部1年次生から大学院生ま
での全学年が揃う最後の年度という節目を迎え、この活動に
一つの区切りをつけることを決めました。地域の方々からは
最終回を惜しむ声も寄せられ、長年「次は子どもたちと何を
しよう」と考え続けてきた私たちも、寂しさを感じています。
しかし同時に、多くの方たちと共に経験を積み重ね、20年
にわたり活動を続けてこられた達成感にも包まれています。

五感を使って自然と遊ぶ 確かな蓄積を感じた最終回

2025年10月11日の最終回では、20年間使ってきた道具や素
材を活用する「蔵出しスペシャル」を企画しました。ブラックライ
ト遊びや匂い体験など、歴代の企画の中でも特に反響が大き
かったものを再現。見る、聞く、触る、匂う、(活動を)味わう。五
感すべてを使って楽しんでもらえるよう、これまでの経験を凝縮
して準備に当たりました。

いよいよ迎えた当日。幅広い年齢層の方に参加いただき、第1回

PROFILE



心理学科 高井 直美 特任教授

専門は発達心理学。子どもの身振り、言語や対人関係の発達を研究。研究活動と並行し、子どもの発達相談や子育て支援教室の活動に従事。



心理学科 薦田 未央 教授

専門は発達心理学、臨床発達心理学。乳幼児期から児童期にかけての
子どもの発達支援やご家族の心理支援に携わる活動を行っている。



こども教育学科 藤本 陽三 特任准教授

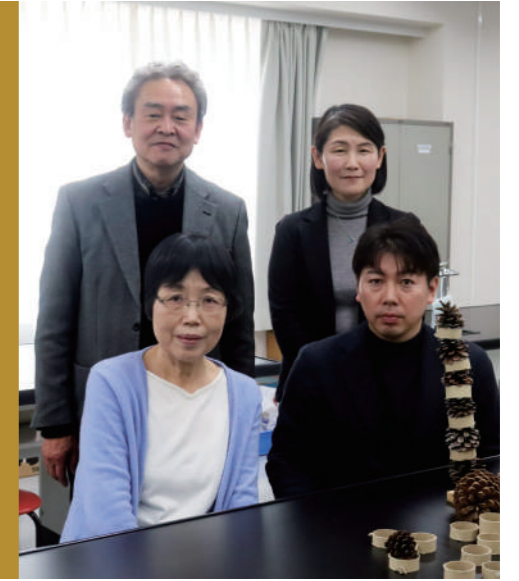
専門は美術教育。京都市内で小学校教員、京都市教育委員会(学
校指導課・教育センター図画工作科担当指導主事)27年間勤務の
後、2005年より京都ノートルダム女子大学勤務。



こども教育学科 兼 女性キャリアデザイン学環

佐藤 真太郎 講師

専門は理科教育学・防災教育。研究テーマは、理科における自然災
害を取り扱った研究。



に子どもとして参加していた男の子が父親として家族を連れて訪
れてくれたり、かつての学生ボランティアが子ども支援の職員とし
て同僚と来場してくれたりと、嬉しい再会がありました。

20年間の感謝を込めて 柔軟な発想を育てる遊びと学びの場

理科の実験の要素を取り入れたり、開催場所を変更したりと、
時代に合わせて姿を変えてきたこの活動ですが、一貫して大切
にしてきたのは「子どもが楽しく、自由に発想できる仕掛けづ
り」です。ルールを作り込みすぎず、子どもたちが自然の中で柔
軟に考えたり、感じたりする機会になるよう意識してきました。
教員と学生が時間をかけて準備したこと、子どもたちが毎回
目を輝かせて楽しむ姿が印象に残っています。

また学生には、子どもたち一人ひとりをよく見て、相手の目線に
立って関わるように、と伝え続けてきました。最初は戸惑いなが
らも、次第に子どもと打ち解けていく様子が見られ、保護者から
は学生が優しく接してくれたと感謝の言葉をいただくことも多く
ありました。学生たちにとっても、教室だけでは得られない貴重
な経験になったのではないかと思います。

「自然と遊ぼう!」という名前には、自然の中で、さまざまな人
と一緒に活動する場にしたいという願いを込めています。振り
返れば、数えきれない光景が浮かびます。遊びに熱中して笑い
転げる子どもたちと、それを見守る保護者の方。イベントを終え
た後の学生の晴れやかな笑顔。子どもと学生が隣り合って座っ
ている後ろ姿。参加して下さったご家族、教職員、学生ボラン
ティアの皆さん、そして諸施設の皆さまに、心からの感謝を申し
上げます。20年間、本当にありがとうございました。



01 巻頭特集
ND VOICE
ND祭実行委員会

03 TOPIC
「自然と遊ぼう!」
教員・学生・地域とともに積み重ねた
かけがえない20年間の経験と学び

05 学生INTERVIEW
・大学広報研究会 MAGIE ESPOIR
・GLOBAL UNIFORCE 2025
・紀州梅道中
・祇園祭 保昌山ボランティア

07 海外ボランティア体験レポート

09 研究者インタビュー
国際日本文化学科 河野 有時 教授
心理学科 菊野 雄一郎 准教授

10 NDと社会

11 先生たちに聞いてみた

12 NDの本

13 Events Diary

15 NEWS

17 INFORMATION

18 SCHEDULE

学生 INTERVIEW

授業やクラブ活動等さまざまな場で活躍する学生の取り組みをピックアップ!

「大学の今」を未来に残す
学内ラジオで新しい形の広報に挑戦

大学広報研究会 MAGIE ESPOIR



MAGIE ESPOIR (以下、ME) は、大学の認知度向上を目的に活動してきた学生団体です。MEに参加したきっかけは、本学の学生募集停止のニュースでした。大好きな大学の力になりたい、そして最後まで思い出をつくりたいと思い、参加を決意しました。現在は、学内ラジオ「マジカル★ダムラジオ」を担当しています。「今の大学の声を残すこと」を目的に、企画からパーソナリティ、編集まで幅広く携わっています。やりがいを感じるのは、普段関わることのない学生や先生と出会える瞬間。ラジオを通じて生まれたご縁の中で、その方々の魅力を伝えられることに喜びを感じています。失敗してしまうこともありましたが、仲間を支えられながら続けてきた経験は、今の私に大きな自信を与えています。



心理学科 4年次生
N.I さん

Q ラジオづくりで意識していることは？

A 出演してくださった方が心地よく聞き返せるよう、言い淀んだ箇所や間の細かい部分まで、0.01秒単位で音源を整えています。

Q 読者へのメッセージをどうぞ！

A このラジオが、学生・保護者・卒業生の皆さんにとって、素敵な学生の活躍や、懐かしい先生方の声にふれられる「大学とのつながりを感じられる場」になれば嬉しいです。

日本文化を学ぶ中で古くから続く行事に興味を持ち、和歌山県出身の友人の誘いを受けてボランティアに参加しました。梅奉納とは、6月6日の「梅の日」に、人々の無病息災を願い、和歌山産の青梅を上賀茂・下鴨の両神社へ奉納する行事です。かつて雨乞いのために梅を奉納したことが起源とされています。当日は女官役として鮮やかな時代装束に身を包み、神社の境内を歩きました。時代装束は着る順番や重ね方が難しく、教えていただきながら準備を進めました。世界遺産でもある本殿は、普段は立ち入ることができない神聖な場所。歴史を肌で感じられる貴重な経験となりました。今後も伝統行事への参加を通して知識を深め、日本文化や伝統を次世代へ残していきたいです。



国際日本文化学科 4年次生
M.H さん

Q 当日の様子について教えてください。

A ボランティアには学生だけではなく幅広い世代の方が参加しており、交流を通して多くの学びがありました。

Q 読者へのメッセージをどうぞ！

A 毎年6月6日の「梅の日」にこの行事が行われています。ぜひ一度足を運んでいただき、歴史や伝統文化に少しでも関心を持っていただけたらうれしいです。

無病息災を祈る神事に参加
伝統文化の魅力を次世代へ

紀州梅道中



踏み出した勇気が、確かな自信へ
国際研修で培ったプレゼン力

GLOBAL UNIFORCE 2025

韓国・済州島で実施された「GLOBAL UNIFORCE 2025」に参加しました。このプログラムは、観光・AI・ESGなどのテーマごとに分かれてフィールドワークを行い、その内容をもとに英語でプレゼンを行う国際研修です。参加のきっかけは平野先生からのお誘いでした。英語に自信がなく迷っていましたが、「挑戦してみない？」という言葉に背中を押され、思い切って参加を決意。

当日は震えるほど緊張しましたが、練習を重ねた発音や話し方が評価されたときは、大きな達成感を得ることができました。今回の経験を通して、人前で発表する力が大きく成長したと実感しています。今後は、聞く人の心により届くプレゼンに挑戦していきたいです。



女性キャリアデザイン学環
1年次生
Y.M さん

Q プログラムで印象に残っていることは？

A 各大学のプレゼン形式が自由で個性的でした。1回目は内容説明だけで終わる大学や、マジックを取り入れる大学もあり、多様な表現が認められている点が興味深かったです。

Q 活動の中で、困難だったことを教えてください。

A 他大学の学生とのコミュニケーションです。英語の速さについていけず戸惑う場面もありましたが、ゆっくりでも自分から話すことで交流が生まれ、友人をつくることができました。

「日本古典文学講読」担当の堀勝博先生のご紹介でボランティアに参加。祇園祭を支える山鉦町の一つである「保昌山」の町会所で、準備や当日の接客を担当しました。事前準備では他大学の学生と協力し、粽に添える花飾りを一つずつ手作業で制作。当日は、保昌山保存会の方に教わった歌を口ずさみながら店頭に立ちました。粽やお守りをお渡ししたときのお客様の笑顔は今でも忘れられません。活動中、保昌山の歴史を尋ねられ戸惑うこともありましたが、保存会の方の温かい指導のおかげで、最後は自信を持ってご案内できるようになりました。今回の経験を通じて、相手に寄り添って言葉を交わす大切さを学びました。今後も思いやりを持って周囲と協力し、喜びを届けられる存在でありたいです。



国際日本文化学科 3年次生
S.H さん

Q この活動の魅力は？

A 自分が心を込めて作ったものがお客様の手に渡り、喜びや幸せを届けられることです。運営に携わることで、これまでとは違った視点から祇園祭の熱気を感じることができました。

Q 読者へのメッセージをどうぞ！

A 保存会の方やボランティアメンバー、そしてお客様の温かさに触れられる活動です。祇園祭に深く関われる貴重な機会ですので、ぜひボランティアにチャレンジしてみてください。



伝統と熱気を感じた夏
お客様に笑顔を届けるボランティア

祇園祭 保昌山ボランティア



海外 ボランティア

体験レポート

海外ボランティアについて

2025年8月24日～9月7日の約2週間、本学の学生がベトナム社会主義共和国ホーチミン市にてボランティア活動を行いました。他国からの参加者と共同生活を送りながら、それぞれ次のプログラムに参加しました。

- Childcare: 幼稚園で子どもたちに英語を教える
- Food outreach: 食糧支援活動としてレストランで配膳などを手伝う
- Special needs care: 病児との交流、介助の支援

本学は「海外研修奨励制度」を設け、海外での研修や留学に挑戦する学生を応援しています。



食を通じて人々を支え、 異文化理解を深める貴重な経験

国際日本文化学科 4年次生
A.O さん

Q. 参加したきっかけは？

A. 現地で食料支援をするフードアウトリーチの活動を通して、貧困問題に関わり、人々の力になりたいと考えたからです。また、先輩から「異文化の中で実際に行動しながら学べる」と教えてもらったことも参加のきっかけになりました。

Q. 現地で印象的だったことは？

A. 直接食事を渡した方々が、丁寧に受け取り、笑顔で何度も感謝の言葉を伝えてくださったことが忘れられません。直接社会に貢献できていると実感でき、大きなやりがいを感じました。また、食が人々の生きる力や希望につながっていることを身をもって感じました。

Q. 自身が成長したポイントは？

A. 普段と全く異なる環境に飛び込む不安はありましたが、戸惑っているだけでは作業は進まないため、自然と「とにかくやってみる」という姿勢が身につきました。活動を通して異文化に触れ、自分の常識が必ずしも正しいわけではないと気づき、相手を受け入れる大切さを学びました。



初めてのチャレンジ 異文化に触れ自信が生まれた2週間

女性キャリアデザイン学環 1年次生
K.H さん

Q. 参加したきっかけは？

A. オープンキャンパスで海外ボランティアの話を知ったことがきっかけでした。大学に入学したら、これまで避けてきたことにも挑戦したいと考えていたため、自分を成長させる良い機会だと感じ、迷わず参加を決めました。

Q. 現地で印象的だったことは？

A. ボランティアでは食事の事前準備から配膳まで担当しました。お皿にそのままのせるのではなく、いくつかの野菜を組み合わせ花の形に盛り付け、美しく配置したことが印象に残っています。休日にはメコン川のツアーに参加し、大河を船で渡りながら、日本とは異なる自然を体感できたことも貴重な経験でした。

Q. 自身が成長したポイントは？

A. 最初は英語が通じず苦労しましたが、ジェスチャーや簡単なベトナム語でやり取りを重ねるうちに慣れ、文法や発音にとらわれずコミュニケーションする力がついたと思います。海外に2週間滞在することへの不安も、この経験で自信に変わりました。



わずか2週間の海外滞在でしたが、学生たちが成長し、自信をつけていく姿は本当に素晴らしいものでした。ベトナム到着初日、皆さんが緊張していた様子を今でも鮮明に覚えています。しかしその一方で、ボランティア活動や英語力の向上に積極的に挑戦しようとする意欲も感じられました。

特に印象的だったのは、ボランティア活動の場面で、一人が勇気を出して会話を始めたり、質問を投げかけたことが周囲にも良い刺激となり、活動の大きな原動力へとつながっていたことです。2週間目には、学生たちは現地に慣れ、まるで経験豊富なメンバーのように、新たに加わったボランティアメンバーのサポートを自然に行っていました。

2週間の活動を終えた学生たちの笑顔には、確かな自信とさらなる成長へ向かう前向きな気持ちがはっきりと表れていました。

スティーブン ハーダー
国際教育センター長 Steven Herder 教授



「普通」の違いに触れ 視野が広がりました

こども教育学科 3年次生
M.F さん

Q. 参加したきっかけは？

A. 1年次にタイの留学プログラムに参加し、多様な国の人と出会う楽しさを知りました。今回はさらに英語力を高め、積極的にコミュニケーションを取りたいと思い、参加を決めました。

Q. 現地で印象的だったことは？

A. さまざまな国から集まったルームメイトと交流したことです。言語や文化の違いに最初は戸惑うこともありましたが、周囲の人や翻訳機に頼って乗り越えました。さらに「NEVER HAVE I EVER」というゲームを通じてお互いのことを深く知ることができ、距離が一気に縮まったことも印象的でした。

Q. 自身が成長したポイントは？

A. 自分にはなかった価値観に触れ、多角的に物事を見る力が身につきました。例えば、ルームメイトが初対面にもかかわらず自分の発達障害を自然に話してくれたとき、「自分を理解してもらったためには普通のことだ」と説明され、驚きました。初めて会った人に個人的なことを話すという考えが自分にはなかったためです。「普通」は文化によって違うと実感し、視野が広がった経験です。



現地の子どもたちのために 粘り強く、工夫して交流を

生活環境学科 1年次生
Y.Y さん

Q. 参加したきっかけは？

A. オープンキャンパスで在学学生の方から海外ボランティアの楽しさを聞き、興味を持ったのがきっかけです。入学してからの説明会では具体的な活動内容や費用の補助について知り、安心して参加を決めました。

Q. 現地で印象的だったことは？

A. チャイルドケアというプログラムに参加し、現地の子どもたちと触れ合いながらベトナムの文化や教育方法について学びました。幼い子どもとの意思疎通は難しかったですが、発音を繰り返し練習したり、ジェスチャーを用いたり工夫を重ねました。

Q. 自身が成長したポイントは？

A. 同じボランティアに参加している海外の人もコミュニケーションを取る必要があったので、英語が一度で伝わらなくても、何度でも伝えようとする粘り強さが身についたと思います。また、この経験を通じて、ボランティア以外にも積極的に新しいことに挑戦してみようという気持ちが強くなりました。



研究者インタビュー

多彩な研究分野を持つ本学の教員たち。今回は2025年度の科学研究費助成事業に採択された2名の先生方の研究をご紹介します。

教材の挿絵が持つ機能とその活用に関する研究

国語の教科書はどうあるべきか？ 文章と挿絵の関係や、読解への影響を紐解く

国語科教育法の授業で、学生の模擬授業を見たことが、研究の出発点でした。教材は「少年の日の思い出」。よく知っているはずの物語なのに、その日はどこか違う印象を受けました。理由はすぐには分かりませんでした。しばらくして挿絵が昔の教科書と異なっていたことに気づきました。同じ文章でも、挿絵が違えば、物語の受け取り方が大きく変わる。この経験から、国語教科書における挿絵の機能や役割を考えてみたいと思いました。教科書はどれも同じように見えますが、出版社ごとに違いがあります。挿絵もその一つです。なぜこの

挿絵が選ばれたのか、どの視点から描かれているのかを問いながら見ていくと、挿絵は文章を彩るだけの存在ではなく、「読む」という行為そのものに関わっていることが分かります。文章を読み解く過程で、絵の細部に思いがけない発見が生まれる点に、この研究のやりがいがあります。今後、教科書の電子化が進む中で、国語の教科書はどうあるべきかが問われるでしょう。挿絵という視点から、ビジュアル化が進む教科書の未来と、「教科書とは何か」という根本的な問いを考え続けていきたいです。

■ 科研費概要 ■

- 研究課題 教材としての挿絵の機能とその活用に関する研究—中学校国語教科書を中心に—
- 研究種目 基盤研究(C)
- 研究期間 3年



河野 有時 教授 KONO Aritoki
国際日本文化学科

博士(文学)。専門は日本近代文学。著書に『啄木短歌論』(2018年3月笠間書院)、『石川啄木』(2012年1月笠間書院)など。

個々の特性に合わせて文字や文章の「読みやすさ」を工夫 子どもたちが安心して学べる教材や環境をつくりたい

読字には個人差があり、「文字が読みにくい」ことが学習上の困難や自己肯定感の低下につながることがあります。これまでも文字が周囲の文字に影響されて読みにくくなる「Crowding現象」に着目し、研究を進めてきましたが、心理学だけでなく保育・教育現場にも関わる中で、子どもたちの学習課題に寄与できないかと模索するようになりました。そこで、専門的知見を現場の課題解決に応用するため、読字困難と

Crowding現象の関連に着目するに至りました。本研究の実験では、文字の見え方に関わる視覚的要因に注目し、心理物理学的な実験を通して読字の正確さや速さ、視線の動きを測定・比較します。この調査結果を現場の課題と結びつけることで、個々の読字パフォーマンスに応じたカスタマイズ教材や教科書の開発が可能になることが期待されます。こうした取り組みを通して、子どもたちの学習効率、自己肯定感の向上に貢献したいと思います。

■ 科研費概要 ■

- 研究課題 Crowdingを用いたディスレクシアにおける大細胞障害理論の検討
- 研究種目 基盤研究(C)
- 研究期間 3年

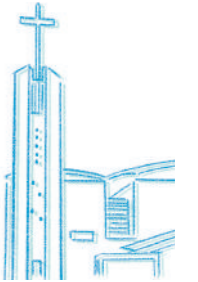


菊野 雄一郎 准教授 KIKUNO Yuichiro
心理学科

英国ノッティンガム大学にて心理学を専攻。京都大学博士号取得。専門は認知心理学。

「文字の読みやすさ」の個人差に着目した科学的調査と支援方法の検討

NDと社会



本学は地域連携・産学連携をはじめとした社会貢献活動を行っています。今号は2025年度に行われた取り組みや継続的な取り組みについてご紹介します。

▶ 「古代都食」商品開発コンペティションで本学学生が受賞しました 2025年9月23日

けいはんなプラザで実施された「古代都食」探求・開発シンポジウムの商品開発コンペティションにおいて、本学学生チームが未来食賞を受賞しました。同シンポジウムは古代から現代、未来へとつながる食文化をテーマとし、講演・トークセッションとともに商品開発コンペティションが行われました。商品開発コンペティションは「古代都食」を感じさせる開発商品の発表会として6組が参加、本学からは学生3名からなるプレゼンテーションサークルチームが発表に臨みました。本学学生チームが発表した「十五夜の微笑み」は、平安時代の十五夜を表したかのような淡い青色の炭酸水にシロップ漬けた青梅が入った飲み物です。試飲した参加者の中には光にかざして色合いを楽しみながら味わっている方もいました。学生は「食材選びが難しかった。試作を重ねておいしいと思えるドリンクを作った」と商品開発の苦労を語っていました。



▶ 「～誰もが快適な生理を～サミット2025」で、本学学生が掲示部門で金賞を、スピーチ部門で銀賞を受賞しました 2025年11月8日

2025年8月に開催された「～誰もが快適な生理を～甲子園2025」において、本学学生が金賞(グランプリ)を受賞し、東京大会への登壇権を獲得しました。学生はスピーチ部門・掲示部門に出場したほか、関西大会に続き司会進行や受付・サポートスタッフとして運営にも参加しました。第一部のスピーチ部門には全国から5団体がエントリーし、生理に関する課題や活動の意義が発表されました。本学心理学科・松島ゼミ、尾崎ゼミの学生は、2023年度から実施してきた女子中高生、大学生、社会人、男性を対象とした調査結果をもとに、年齢や性別を超えた理解促進の重要性と改善策を提案しました。第二部では研究者によるセミナーが行われ、第三部の授賞式では調査に基づく発表内容が高く評価され、本学がスピーチ部門で銀賞、掲示部門で金賞を受賞しました。



▶ 「AIやデジタル技術」を学ぶ市民講座“DXリカレント講座”にのべ82名が参加！ 2025年9月～11月

2025年9月から11月にかけての3回にわたって、本学で市民向けのDXリカレント講座を開催しました。本講座は、連携推進室と社会情報学環が企画し、京都市のふるさと納税寄付金を活用したもので、3回を以下のテーマで実施しました。受講者アンケートでは3回の平均で97%の方が「満足した」と答えるほどの非常に高い満足度で、本学の情報教育の充実を市民の方にアピールする良い機会になりました。

- 9月28日(日) “使われる技術”ってなんだろう？ ～社会に広がる技術の共通点～
- 11月16日(日) デジタル画像の世界をのぞいてみよう ～画像データでAI入門～
- 11月30日(日) 言葉を操るコンピュータの世界をのぞいてみよう ～テキストデータでAI入門～

NDホールでの講演会に加えて、情報演習室での実習をしながら学べるスタイルとし、受講者に対して本学の社会情報学環の学生が実習をアシスタントしました。当日の実習で「AIとデータサイエンス」を学ぶ教材は、2025年夏に本学の教員が中心となり執筆した『はじめてのAIデータサイエンスリテラシー』(P.12参照)で紹介しているもので、当日の講師も担当しました。



執筆者5名 左から、ドゥラゴ、北村、金光、小野、吉田

2026年度以降も実施していきたいと思っておりますので、ご期待ください。

先生たちに聞いてみた

今回の「先生たちに聞いてみた」では、京都の地形と都市の関係を長年研究し、「京都高低差崖会 崖長」としてもまち歩きを続ける梅林秀行先生にお話を伺いました。研究の視点から見える京都の奥深さ、現地を歩いてこそ語れるエピソード、これから学ぶ人へのメッセージまで。「見慣れた京都」が少し違って見えてくる——そんな新しい気づきへの入り口を、先生の言葉とともにお届けします。

UMEBAYASHI Hideyuki



梅林 秀行 客員教授

専門は都市史、空間史。
近著『京都の凸凹を歩く』
(2016年 青幻舎)。

先生の研究分野は？

私の研究分野は、人々のくらしや活動を、場所や土地の変化から考える「空間史」です。空間という要素に着目したとき、京都という都市は、平安京の建設から、アジア太平洋戦争時の建物疎開、さらに現代の開発まで多くの「断絶」を繰り返してきたことが分かります。このように見えていくと、京都の特徴は「変わらない伝統」ではなく、時代に応じて変化し続けてきたことにあると言えます。伝統と一括りできないダイナミズムこそが、京都の持つ変わらない特性と言えるのではないでしょうか。景観破壊という空間の変化に直面する現代の私たちにも関係するテーマです。

京都高低差崖会としての活動は？

京都高低差崖会は、京都を中心に、坂道や崖などの高低差に注目しながら、まちの地形を歩いて観察する活動を行っています。活動の醍醐味は、さまざまな人と交流できること。市民の方と対話を重ねると、私の問題に対する意識が変わったり、考えが深まっていったりするため、ありがたく思っています。また、フィールドワークを通して今の社会が抱えている課題に多くの人と一緒に向き合い、考えながら街を歩くことも重要と感じています。

京都や大学近辺でのフィールドワークを通して得られた発見は？

大学周辺は、京都の中でも現代的な街並みが広がっています。しかし、よく観察してみると、道路に沿って流れる農業用水や灌漑用の水門、旧松ヶ崎村に由来する農村風景が今も残っていることに気づきます。これらは、この地域がかつて郊外農村として発展してきたことを示しています。街の風景は一つの時代でできているのではなく、重なり合った歴史が形作っていると感じました。

「京都フィールドワーク研究」の内容は？

観光の文脈で語られる京都は、決まったイメージで見られがちです。しかし、視点や切り口を変えたり、違和感を発見・抽出したりすることで、全体のイメージや構造が作り替えられていくことがあります。このように、当たり前だと思われている見方を組み替えて考える方法を「脱構築」と呼びます。景観や地形、空間といった要素に注目し、フィールドワークを通して、各々が新しい「京都」の姿を見つけていくことを目指しています。

研究の今後の展望は？

理論・実践の両面でまだまだ学ばなければいけません。歴史を空間の変遷に着目して解釈し直せば、どんなことが考えられるか、ということの研究の中核に据えており、今は二条城を例にして、街の変化と武家権力の関係について再解釈できないかと検討しています。

message

私たちが用いる言葉は、本から得られるものばかりです。また、一冊の本はまた別の本によって性格づけられます。なので、できるだけたくさん本を読むこと。できれば、長い時間のなかで数多くの批評や批判をぐぐり抜けてきた本、つまり、古典的著作をたくさん読むこと。結局のところ、勉強に勝るサバイバルスキルはありません。図書館で過ごした時間は、かならず未来のあなたを助けてくれるのです。

NDの本

本学教員が発刊に関わった書籍を紹介します。

情報の科学と倫理

編著：神月紀輔 出版社：丸善雄松堂 発行：2025年4月1日

オンライン科目「情報の科学と倫理」対応、見やすく使いやすい電子テキスト

本学のオンライン科目「情報の科学と倫理」で使用される授業テキストです。時間や場所を問わずに学習できる電子書籍形式となっています。また、理解の助けとなるカラー資料を豊富に掲載しました。

神月 紀輔 教授
こども教育学科
(兼 社会情報学環)

授業1回分を見開き2ページで完結させ、コンパクトにまとめました。また、各章にめあてと振り返りを取り入れることで、学習を進めやすいようデザインしています。難解な内容も理解しやすい構成を心がけました。

手を動かしながらやさしく学べる はじめてのAIデータサイエンスリテラシー

著者：北村美穂子、金光安芸子、ドゥラゴ英理花、小野陽子、吉田智子 出版社：技術評論社 発行：2025年8月22日

身近な題材からAIとデータサイエンスを楽しく学べる入門書

本書は、本学とWolfram社の産学提携により共同開発されたオリジナル教材をもとに制作されました。2022年度から本学で実施している「AIとデータサイエンス入門」の授業内容をもとに、身近な題材で実習しながらAIとデータサイエンスの本質を、直感的かつ視覚的に学べます。読者が数学やプログラミングが得意でなくても、Wolfram言語が持つ豊富な関数や美しいグラフィック技術を活用することで、楽しみながら理解を深めることができる章構成になっています。

北村 美穂子 特任教授 社会情報学環
金光 安芸子 客員教授 社会情報学環
吉田 智子 教授 社会情報学環(学環長)

近年、私たちの生活に欠かせないものとなったAIやデータサイエンスの技術を、わくわくしながら学んでほしいという熱い思いから、私たちは本書を企画しました。授業で見られたつまづきや学生の関心を丁寧に反映して制作を進めました。本書は、全ページ(208ページ)がカラー印刷されており、たくさんのカラー写真や画像、出版社のイラストレーターによるイラストを含んでいます。一般書として全国の書店で広く販売されていますので、まずは手に取っていただければと思います。

就活メディア「就活の教科書」濱中先生インタビュー記事掲載

「一生懸命取り組むからこそ、仕事は楽しい」20年間のキャリア支援を経て伝えたいこと

就活メディアにインタビュー記事が掲載された濱中倫秀先生に、進路選択を考える学生に向けての思いを伺いました。

本学での仕事が始まってから、20年にわたり学生の進路・就活支援に携わってきました。企業と連携し課題解決に挑む「キャリア形成ゼミ」や、対話を重視したポスターセッション形式の実習発表会など、学内外の多くの人と交流しながら、学生が主体的に学べる環境を整えています。就職活動中、選考に漏れると自分を否定されたように感じるかもしれませんが、多くの面接を行ってきた経験から言えるのは、「落ちた＝能力不足」ではなく、相性(マッチング)の要素もかなり大きいということ。皆さんに最も伝えたいことの1つでもあります。また、就職先を選ぶ際、残業時間などの条件も大切ですが、それ以上に「会社の仲間やお客様を愛せるか」という視点を持ってほしいと思います。「楽しい仕事だから頑張れる」のではなく、周囲の人たちと

一生懸命取り組むからこそ、仕事は楽しくなるものです。そして、就活自体をゴールにするのではなく、理想の未来を掴むための1つの選択肢として、進路を考えてほしいと願っています。

濱中 倫秀 准教授 社会情報学環
ND教育センター、
キャリアセンターに所属。



株式会社Synergy Career「就活の教科書」
濱中先生インタビュー掲載記事はこちら



NDのイベントに密着 Events Diary

2025年9月～2026年1月に実施した、学内の活動の一部をご紹介します。

前期卒業式・学位授与式

2025
9.25

聖堂にて令和7年度前期卒業式が執り行われ、学部生8名が本学伝統のキャップとガウンを身にまとい、式に臨みました。中村久美学長より卒業生全員に学位記が授与され、卒業にあたっての式辞が述べられました。参加者全員でこの佳き日を迎えられることを感謝しました。



物故者追悼ミサ

2025
11.13

令和7年度物故者追悼ミサが執り行われました。このミサは、毎年、ご逝去された本学教職員・関係者および卒業生の方々の安息を祈るために行われています。当日は、カトリック京都司教区鶴山進栄神父様司式のもと、在学生、教職員等がユニソン会館大ホールに集い、ご逝去された皆さまの魂が、神のみもとに帰り、永遠に安らかに憩うよう祈りを捧げました。



ノートルダムクリスマス

2025
12.18

ノートルダム学院小学校・ノートルダム女学院中学高等学校・京都ノートルダム女子大学の3校合同によるノートルダムクリスマスが開催されました。合同合唱団・中高オーケストラクラブの演奏とともに、3校の児童・生徒・学生によるナレーションに合わせて、舞台上で小学校の児童・本学学生が聖劇を演じました。カトリック京都司教区鶴山進栄神父様のお話に耳を傾け、キリスト降誕を祝う時間を共にしました。



9
Sep.

10
Oct.

11
Nov.

12
Dec.

1
Jan.

生活環境学科公開講座

地域の居場所づくりプロジェクト「寄合処 集い場」

—地域連携・協働の必要を大学とともに実働として—

元気な高齢者が、役割と生きがいを持って参加する地域の居場所づくり「寄合処 集い場」をテーマに公開講座を実施しました。本学の三好明夫特任教授に加え、特定非営利活動法人とらい・あんぐる理事・事務局長の石田氏、株式会社アイリーフが運営する「五日市」および「八幡の里」の管理者、ならびに特定非営利活動法人とらい・あんぐる理事の香川氏の3名を講師としてお迎えし、それぞれの立場から活動の主旨と理念、実践報告、そして今後の期待と課題についてご講演いただきました。講演会の中ほどには、「寄合処 集い場」の石田氏と交流のある山本氏がスペシャルゲストとして登場、素敵なギター演奏が披露されました。



2025
11.15

在学生による短編映画制作プロジェクトに関する記者会見

2026
1.21

本学にて在学生による短編映画制作プロジェクト始動に関する記者会見を行いました。本プロジェクトは、大学広報研究会「MAGIE ESPOIR(マジ・エスポワール)」所属の学生が主体となり、企画立案から撮影・編集までを手がける短編映画制作の取り組みです。記者会見では、プロジェクトの概要説明に加え、制作に込めた想いやテーマ、今後のスケジュールについて学生から発表が行われました。当日は、複数の報道関係者にもご出席いただき、学生たちの意欲的な姿勢や創作への熱意に多くの関心が寄せられました。完成した作品は2026年3月に本プロジェクトをご支援くださった皆さまに向けて上映される予定です。(上映会についてはP.18参照)





生活環境学科3年次生対象の学科特別プログラム 「香りの美学」特別講演!

10月15日、3年次生対象の学科特別プログラム「香りの美学」を開催しました。講師は中川晴美先生、アトリエ・アローム&パルファン・パリのエグゼクティブ認定講師(調香師)として活躍されています。

ムエット(試香紙)を用い6種の香料の香りを言葉にし、レシピを考え香水をつくる体験をしました。香水の名前を決め、どんな時に用いるのかコンセプトを考えます。そしてそのコンセプトに合わせて、6種の香料をトータル100滴になるよう組み合わせ、香水のレ

シピを考えるという体験です。

学生からは、「香水について普段考えたことがなかったが、これからはマナーを守って上手に使いたい」「香料が複数合わさると全く違った香りになるのがとても不思議だった」「香水のレシピを考えるのが難しいけれども楽しかった」など多くの発見、学びがあったようです。

「見えないものだから大事なんです」という先生のお言葉が印象に残る、素敵な特別プログラムでした。中川先生、ありがとうございました!



シスター メリーマイクル田代梅様 追悼ミサを執り行いました

10月1日、学校法人ノートルダム女学院の元理事長であり、本学の元学長でおられたシスター メリーマイクル田代梅様のご帰天を受け、京都ノートルダム女子大学聖堂において追悼ミサを執り行いました。当日は米田彰男神父様司式のもと、多くの参列者とともに、故人のご功績に感謝し、永遠の安息を祈るひとときとなりました。



高校生が大学で就業体験

11月7日、飛鳥未来高等学校京都キャンパスの生徒の皆さんが、企業訪問の一環として、「京都ノートルダム女子大学で働くとは」をテーマに、教職員と交流しました。大学施設を見学後、建学の精神から教職員の仕事内容、やりがいについても話がおよびました。この訪問を通して、本学についてより深く知っていただく機会になったと思います。今回の経験が、皆さんの今後のキャリアを考えるうえで少しでもお役に立てると嬉しく思います。



同窓会中部支部の皆さまが 本学に来校されました

10月31日、同窓会中部支部の皆さまが本学に来校されました。学内見学や懇談を通して、近況報告や思い出話が交わされ、和やかなひとときとなりました。今後のつながりを大切にしていきたいと感じる訪問となりました。



第23回カトリック女子大学総合スポーツ 競技大会が開催されました!

11月15日・16日の2日間、第23回カトリック女子大学総合スポーツ競技大会が、東京・聖心女子大学にて開催されました。本学を含む4大学が参加し、スポーツを通じて交流を深めました。バドミントンは昨年に続き優勝し2連覇を達成、硬式テニスは2位、バスケットボールは3位と健闘しました。多くのご声援をありがとうございました。次回第24回大会は、2026年12月12日・13日にノートルダム清心女子大学で開催予定です。



本学の学生が左京区民ふれあいまつりに 参加しました

11月30日、左京区役所で開催の「左京区民ふれあいまつり」に、地域連携・地域貢献の一環として女性キャリアデザイン学環専門教育科目「ワークショップ(Can)」の受講生7名が総合司会として参加しました。地域の皆さまに日頃の学修の成果を披露することができ、大変貴重な体験となりました。



タマサート大学特別講師による 「教育心理学概論」での特別講義

本学はタイの国立大学であるタマサート大学(Faculty of Learning Science and Education: 学習科学教育学部)と学術および教育協力に関する協定を結んでいます。2025年2月の本学からの訪問に続き、10月10日にはタマサート大学よりDr. Adisorn Juntrasook氏を迎え、ランチタイムチャットおよび「教育心理学概論」の授業を実施しました。タイ社会における偏見や差別に関する調査結果が紹介され、学生は日本との共通点や相違点に触れながら、多様性と社会課題について理解を深めました。多言語が飛び交う活発な質疑応答も行われ、国際的な学びの場となりました。



キャリア形成ゼミ成果発表会

本学はキャリア教育の一環として、企業や地域と連携しながら、「企画力・実践力・協働力」を身につけることを目的とした「キャリア形成ゼミ」を毎年開講しています。11月29日は5つのゼミが活動の成果・成長をプレゼンしました。審査員から結果発表後に評価ポイントや今後に向けての改善点が共有されました。学生にとって今後につながる貴重な機会となりました。



キャリア実習・社会情報インターンシップ成果発表会

キャリア実習成果発表会が10月23日に行われました。実習で得た学びや成果をポスターセッション形式で今後の学生生活や就職活動へどう生かすか発表しました。教職員をはじめ、実習先のご担当者様にもお越しいただき、近い距離での意見交換や質疑応答など、直接の対話を通してさらに学びが深まったことと思います。



在学生と歩み続けるために

学生募集停止後も、入試・広報課は在学生に寄り添い続けています。
学生の活動や日常をSNSで発信するなど、大学の「今」を伝える取り組みについてご紹介します。



Q 学生募集停止後、入試・広報課の役割はどのように変わりましたか。

学生募集は行っていませんが、私たちの役割が終わったわけではありません。むしろ今は、在学生一人ひとりが安心して学生生活を送り、卒業まで充実した時間を過ごせるよう支えることが、入試・広報課にとって大切な仕事だと考えています。

Q 在学生へのサポートとして、どのようなことを意識していますか。

学生の活動や日常がきちんと「見える」ようにすることです。行事や授業、課外活動など、学生が主体的に取り組んでいる姿を発信することで、「自分は一歩ずつ成長できている」「大学の一員である」という実感につながればと思っています。

Q SNS 発信にも力を入れているそうですね。

はい。InstagramやTikTokを中心に、学生の活動を積極的に紹介しています。完成された姿だけでなく、準備の様子や日常の一コマなど、等身大の学生の姿を大切に発信しています。

Q 広報を通して伝えたいことは何でしょうか。

学生募集停止後も、大学の時間は止まっていません。学生は今も学び、挑戦し、成長しています。
その姿を伝え続けることが、私たち入試・広報課の使命だと思っています。

「資格取得・進路応援奨励金制度」新設

本学では、学生の皆さんの学びと成長を支えるため、これまで多様な奨学金・奨励金制度を整えてきました。2025年度からは、これらの取り組みに新たに「資格取得・進路応援奨励金制度」が加わりました。

本制度は、学生の皆さんが資格取得に挑戦し、学習意欲を高めるとともに、将来の進路選択の幅を広げることを目的としています。本学が指定する資格を取得した場合に奨励金を給付し、その努力を積極的に後押しする仕組みです。

この奨励金の原資は、本学で長年にわたり教育研究に尽力された故・住田幸次郎名誉教授より本学の教育の発展のためにと託された遺贈金です。

また、住田名誉教授のご遺志を受け、本制度にとどまらず、海外研修や学会・研究会、課外活動等、学内外での様々な学修活動を支援する取り組みも実施しています。これらの支援を通じて、学生の皆さんがより豊かな学びの機会に出会えることを願っています。

在学生の皆さんで「資格取得・進路応援奨励金制度」に関心をお持ちの方は、学内ポータルサイト manaba 内「オンライン事務局」で詳細をご確認ください。

公式SNSアカウントの
ご紹介



Instagram



Tik Tok



facebook



X



YouTube

スケジュール

SCHEDULE



本学の最新情報は
公式サイトを
ご確認ください。



- 在学生
- 卒業生
- 教職員
- 保証人(保護者)
- 一般

2026年3月14日(土)

在教保

卒業式・学位授与式

時間/10:30~
場所/ユニソン会館大ホール
お問い合わせ/総務企画課
TEL.075-706-3700



2026年3月26日(木) 27日(金)

在

定期健康診断

時間/9:00~15:00
場所/ユニソン会館大ホール
お問い合わせ/保健室
TEL.075-706-3741

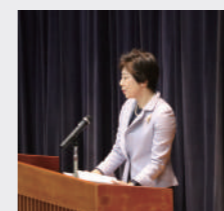


2026年4月2日(木)

在教保

大学院入学式

時間/10:00~
場所/ユージニア館聖堂
お問い合わせ/総務企画課
TEL.075-706-3700

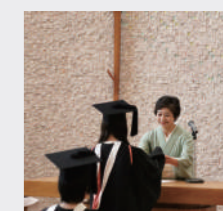


2026年9月25日(金)

在教保

前期卒業式・学位授与式

時間/10:30~
場所/ユージニア館聖堂
お問い合わせ/総務企画課
TEL.075-706-3700



その他のスケジュール

- 4/8: 前期授業開始
- 7/30-8/6: フォローアップ期間
- 8/8-8/17: 事務取扱休止
- 9/28: 後期授業開始日

Pick Up!

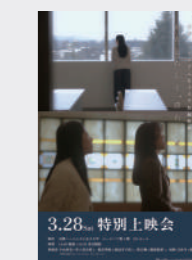
2026年3月28日(土)

在学生による短編映画 上映会

本プロジェクトをご支援くださった皆さまを対象に、短編映画の上映会を開催予定です。
(本プロジェクトに関する記者会見の様子はP.14を参照)

時間/14:00~(受付13:00)
場所/ユージニア館NDホール
お問い合わせ/入試・広報課
TEL.075-706-2857

※詳細につきましては、決まり次第、大学公式サイト等でお知らせいたします。



編集後記

▶入試・広報課の役割は「募集」から「記録し、伝えること」へと形を変えています。しかし、私たちの根底にある想いはこれまでと何一つ変わりません。それは、ここで学ぶ学生一人ひとりの時間と歩みを大切に、その姿を丁寧に支えていくことです。本冊子に掲載されている学生たちの活動からは、日々の学びに真摯に向き合い、自分らしく挑戦を重ねる姿が伝わってきます。キャンパスには今も変わらず、学生の笑顔や熱意、未来へ向かう確かな力があります。私たちはこれからも、在学生の「今」をしっかりと見つけ、学びの記録と想いを発信し続けていきます。本冊子が、その確かな歩みの一端として、皆さまの心に届くことを願っています。(中)

京都ノートルダム女子大学 大学報 2026年3月1日

NDキャンパス通信 Vol.24

編集・発行/ 京都ノートルダム女子大学 管理運営部 入試・広報課
〒606-0847 京都市左京区下鴨南野々神町1番地
URL : https://www.notredame.ac.jp
E-mail : kikaku-koho@notredame.ac.jp
制作 / 株式会社WAVE

本誌は京都ノートルダム女子大学ND育友会の資金援助を一部受けています。
※掲載している情報は制作時点(2026年2月下旬)のものであります。

京都ノートルダム女子大学への

寄付のお願い

聖母マリアを校名にいただく京都ノートルダム女子大学は、建学以来、多くの皆さまからのご支援により支えられ、「徳と知」を兼ね備えた女性の育成を行って参りました。しかし、大学を取り巻く環境は年々厳しくなっており、優れた教育を学生へ提供し続けるために、教育活動や奨学金の強化等が不可欠となっています。

そのため、京都ノートルダム女子大学を応援していただいている皆さまに、教育充実を目的とした募金のご支援を賜り、皆さまとともに学生の豊かな学生生活を支えて参りたいと思っております。何卒ご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

京都ノートルダム女子大学
学長 中村 久美

■ お申込み方法

I：銀行振込によるご寄付

銀行・郵便局からご寄付いただけます。



<https://www.notredame.ac.jp/donation/furikomi/>

II：インターネット募金

クレジットカード、インターネットバンキング(Pay-easy(ペイジー))、コンビニ支払のいずれか便利な方法を選択してご寄付いただけます。



<https://hojin.notredame.ac.jp/donation/>

III：古本募金

皆様から読み終えた本・DVD等をご提供いただき、その査定換金額をご寄付いただく取組みです。



<https://www.notredame.ac.jp/donation/furuhonbokin/>

IV：ふるさと納税寄付金を活用した地域連携活動支援

寄付金については、京都ノートルダム女子大学及び京都市で取組む、大学・学生と地域の連携促進事業等に活用されます。



<https://www.notredame.ac.jp/donation/furusato/>

Present

I：銀行振込によるご寄付、II：インターネット募金による寄付を5,000円以上頂いた方には、以下のうちご希望の品をお送りいたします。

- A：ND祭(秋開催)で使用出来るチケット
- B：京都ノートルダム女子大学オリジナルグッズ、NDクリスマスカード送付(12月)

※領収書を送付する際に、返信用書類(メールもしくはFAX)を同封いたしますので、そちらでご希望の品物(AまたはB)をお選びください。

寄付金に関する
お問い合わせ

京都ノートルダム女子大学 管理運営部 財務課
E-mail: accounting@notredame.ac.jp TEL.075-706-3703 FAX.075-706-3707